

## 都立高校における外国につながる生徒への進路指導

### —志望理由書の指導から見たもの—

長谷川聡子・坂本昌代（都立南葛飾高等学校）

#### 1. 学校の概要と進路指導体制

本稿は東京在住の外国人生徒を対象とした「在京外国人生徒対象入学者選抜」を行う8校のうちの1校における実践報告である。創立80年を数える地域に根差した高校で、ここ数年は大学進学率の上昇(17%→30%→32%)が顕著である。在京生<sup>1)</sup>の受け入れ6年目となる現在は約60名が在籍しており、「取り出し」授業等の指導のために国語科の教員1名が加配されている。放課後の日本語指導や多文化理解を目的とする課外活動等も行っているが、入学から進級、卒業、進路実現までには課題が多く、支援委員会を中心に支援体制の構築に取り組んでいるところである。

進路多様校のため全生徒に対して3年間を通したきめ細やかな進路指導が行われており、在京生に対しては担任以外にも進路指導部の1名が主担当として指導を行っている。1年次からオープンキャンパスや外部の進路ガイダンスに全員で参加するほか、教務部を中心に日本語能力試験の団体受験や対策講座の実施等、資格取得の支援も行っている。3年次には「総合探究」の授業で大学・専門学校・就職等の志望別にキャリア教育を行っているが、そこに在京生コースを設けて担任と進路指導部担当者の2人で在京生全員をまとめて指導する体制を取っている。

#### 2. 在京生の進路状況

入学時は毎年約80～90%の在京生が大学進学を希望するが、最終的には経済的な事情や志望校の不合格等により断念する生徒もいる(4期生では現時点で6名が専門学校・就職に変更)。

在京生の進路指導においては、日本語能力だけでなく大学や職業に関する情報不足、在留資格の問題などクリアすべき課題が数多くあるが、中でも自分が何に興味関心をもち、何のためにどこで学ぶのかという自己理解が非常に重要である。しかし、3年次の4月時点でそれらが明確で志望校や受験方法が決まっている生徒はほとんどおらず、1学期末～2学期に入ってからようやく決定する生徒が多いため、受験準備が遅れてしまうのが大きな課題である。

大学の受験方法については、一般選抜よりも総合型選抜などの自分の強みを活かせる入試での受験者が年々増えている。共通テストの「外国語」で母語を選択する、英検やHSK等の資格を活かす、日本語能力試験N2を活かし「外国にルーツを持つ生徒対象入学試験」等の特別な入試を受ける等の例がある。年度により個々の生徒の状況は大きく異なるため一概には言えないが、一般選抜での受験者が減少した理由としては、卒業生の受験実績等の様々な情報により生徒と保護者の日本の大学受験に対する理解が徐々に深まってきた可能性が挙げられる。

表1 在京生(1～4期生)の進路

|       | 大学             |                 |                      |               | 専門<br>学校 | 留学 | 就職   | その<br>他 | 合計  |
|-------|----------------|-----------------|----------------------|---------------|----------|----|------|---------|-----|
|       | 一般選抜<br>(一般入試) | 総合型選抜<br>(AO入試) | 学校推薦型選抜<br>(指定校推薦入試) | その他の<br>特別な入試 |          |    |      |         |     |
| 1～3期生 | 11             | 6               | 6                    | 2             | 10       | 3  | 2    | 8       | 48人 |
| 4期生   | 0(2)           | 6               | 1                    | 1             | 2(2)     | -  | 3(2) | -       | 19人 |

「その他の特別な入試」とは、難民・留学生・外国にルーツを持つ生徒を対象とする入試である。  
4期生(現3年生)については、2月22日時点での決定者(活動中)の人数とした。

### 3. 総合型選抜等の出願書類作成指導

在京生が進路選択までに深めてきた自己理解を言語化し、志望理由書等の書類を指定の字数で完成させるまでには、非常に多くの指導時間を要する。本発表では、2000字の自己推薦書（母語の資格を活かした総合型選抜）の指導事例を紹介する。2回目の受験で合格するまでに書いた原稿は全13稿、対面で15回、通信アプリで12回、概算で約36時間の指導を行った。これに出願手続きや面接指導の時間も加えると、総指導時間は約53時間にのぼる。

表2 指導の流れとチェックポイント（実際の文章の具体的な変容については発表にて報告する。）

**第1段階…全体の構成や段落が整理されておらず、各段落の内容も浅い**

- ・外国につながる自分だからこそ書けるものになっているか…日本語ネイティブでないこと≠デメリット
- ・書き方の基本、全体の構成（一つ一つの段落のつながり）を意識しているか
- ・その大学のアドミッションポリシーや特色を、自分のことと関連づけられているか
- ・各段落が一般的な内容（誰が書いても同じもの）ではなく、具体的な内容になっているか

※失敗や挫折を語ってもよいということ、過剰な比喩表現は好まれないこと等、母国の文章教育との違いにも注意

生徒の文例：「中学校の先生の影響を受けて私も未来のように憧れて辛抱強くて人気のある先生になります。」

教員の問い：「どんな先生で何をしてくれて、どう変わった？どんな先生になって、誰に何をどう教えたい？それは何のため？」

**第2段階…全体の構成や段落がやや整理され、各段落の内容もやや深まっている**

- ・与えられた「問い」の「答え」として全体が一つのストーリーになっているか
- ・導入とまとめの部分に何を書き、本論の部分に何を書くか、明確に意識できているか
- ・個々のエピソードが、言いたいことを伝えるために本当に必要な内容になっているか、追加・補足はないか

※本人が意識化・言語化できていない経験や思考がないか、様々な角度から掘り下げる質問で引き出す

生徒の文例：「立派な先生になりたいです。日本で中国語を教えて、多くの人に中国の言語文化を理解してもらいたい。」

教員の問い：「立派な先生とは？どんな学校で、どんな人に教えたい？何のために？言語文化とは？そう思ったきっかけは？」

**第3段階…全体の構成や段落が整理され、各段落の内容も深まっている**

← 日本語の添削開始

- ・アドミッションポリシーやパンフレット等から重要なキーワードを拾えているか
- ・語彙や表現がより自分の考えに近いものになっているか

← 新しい語彙・表現の指導

※「異文化コミュニケーション能力」や「協働する力」、「問題解決能力」など、各大学が用いている語彙に合わせる

生徒の文例：「このきっかけから母語を学ぶことの大切さを感じ、日本で暮らす中国ルーツの子供に母語を教える仕事がしたい…」

**第4段階…書類完成・清書・提出**

- ・完成した原稿を「自分のことば」として理解し、自分のものにしていくことができるか

このすべての段階において必要なのは、やさしい日本語による「対話」である。そのためには、生徒の個人的な経験や価値観、母語・母文化を理解しようとする教員側の姿勢も欠かせない。日本語能力だけでなく母語による文章力も十分でない生徒に根気よく付き合い、教員が感じた疑問や違和感を見過ごさずに一歩踏み込んで聞き取っていくことが大切である。対話の根幹は、「何のため」という問いである。この過程で生徒は徐々に自身の内面と向き合い、目標や考え方もより深いものへと変化していく。遠回りのようでも一人一人との対話を重ねることが合格への「近道」だと言えるが、一方で、在京生への指導の流れや注意点を「見える化」し、できるだけ効率的に多くの教員が指導に関わりやすくする工夫や体制づくりをしていくことも重要な課題である。

### 4. まとめと今後の課題

現在は教員個々人の指導に頼る部分が多いのが一番の課題である。進路指導には在留資格や評定平均など個人情報への把握が必要なため、外部の力を活用しにくい面もある。また、根本的な課題としては、3年間で進路実現のために必要な日本語能力や学力を十分に伸ばせる体制が整っていないことも挙げられる。令和5年度から始まる「特別の教育課程」の導入を見据え、今後はカリキュラム等の改善についても検討し、学校全体で支援体制の充実を図っていく必要がある。

注)

1) 当該校では「在京外国人生徒対象入学者選抜」で入学した生徒に加え、一般入試で入学したが日本語指導を必要とする生徒もあわせて、広義で「在京生」と称している。